

# 伊賀

伊賀上野

伊賀上野支局

〒518-0861 伊賀市上野東町2925  
キタビル2F

☎(代)0595-21-5143 FAX 21-5435

名張通信部 ☎0595-64-3430

ホームページ

www.yomiuri.co.jp/local/mie/

販売センター 名張 ☎0595-65-6364

名張東部 ☎0595-65-6364

伊賀上野 ☎0595-24-1638

伊賀中央 ☎0595-24-9394

黒滝・物語村  
かぐり望の宮  
森の交流館  
〒518-0241 伊賀市黒滝村黒滝1  
TEL.0747-62-2770  
FAX.0747-62-2772



FCアヴェニータソル・コーチ 森島 佑太さん 22

「全力でゴール前に行く!」「ナイスプレー!」。伊賀市野村の真新しいスタジアムでFCアヴェニータソルが挑む練習試合。ピッチを駆ける小学生に、コーチの森島佑太さん(22)の声が飛ぶ。「目標は日本一のクラブ。もっと底上げを図っていきたい」と目を輝かせる。古巣のクラブに戻り、指導者への歩みを再スタートしたのは昨年4月。きっかけは新型コロナウイルスの世界的な感染拡大だった。小学1年でサッカーを始め、3年生の時に設立間もないFCアヴェニータソルに入った。当初は借りた広場の石拾いをしながら練習。それでも、中学3年の時にeisu杯県ユース(U-15)サッカー選手権大会で優勝した。ポジションはゴールキーパー。日本代表を目指し、強豪・県立四日市中央工業高校へ進学した。

しかし、高校時代はトップチームの中では2番手。公式戦出場の場合はほとんどなく、プロに進む難しさも感じていた。2年の時、小中学校時代にクラブで薫陶を受けた監督ががんで急逝した。生活態度にも厳しく、やんちゃだった自分を変えてくれた。「監督のような人間力も磨く指導者になりたい」。将来を決めた。

大学ではスポーツマネジメントを学び、関西学生サッカー連盟でリーグの運営に携わりながら、サッカースクールでコーチもこなした。3年だった昨年2月、サッカー先進国スペインのバルセロナへ渡った。語学を学びながら、地域のチームで指導者修業を積み、コーチライセンスを取得する計画だった。

しかし、新型コロナウイルスの流行で、街はロックダウン(都市封鎖)され、学校の授業はオンラインに。外出も制限された。帰るべきかどうするべきか。2週間考え、帰国を決断した。

4月に伊賀に戻ると、クラブを運営するNPOの理事長中田純一さん(57)からクラブへの参加を誘われた。

卒論を書きつつ中田さんの会社で働き、平日は夕方から週末は朝から指導する。中田さんは「佑太なら指導陣のチームワークに必要なクラブの理念、価値観の共有ができる」と期待を寄せる。

周囲に合わせ個性を出せない子ともたに、「どうしたかったのか」とプレーをただし、考えさせた。すると自分の色を出すようになった。U-11のチームは、JFA全農杯チビリンピックU11県少年サッカー大会阿山地区予選を1位で通過。県大会への出場権を得た。

コロナ禍で人生設計の変更を強いられたが、「ここでもチームを強くする中で学べることもある」と前向きに捉えている。

「育成世代の指導で結果を出し、将来は指導者として『日の丸』を背負いたい」。この再出発は、サッカーの神様に導かれた必然だったと信じている。(立山光一郎)



## 夢を追う君たちと

新型コロナウイルスの感染拡大の中で、世界は一変し、私たちは家庭や職場、学校など様々な場面で困難に直面している。しかも、いまだに先行きが見えない。そんな逆境の中で、新たにスタートを切った人たちがいる。伊賀地域で歩み始めた人たちを追った。

「全力でゴール前に行く!」「ナイスプレー!」。伊賀市野村の真新しいスタジアムでFCアヴェニータソルが挑む練習試合。ピッチを駆ける小学生に、コーチの森島佑太さん(22)の声が飛ぶ。「目標は日本一のクラブ。もっと底上げを図っていきたい」と目を輝かせる。古巣のクラブに戻り、指導者への歩みを再スタートしたのは昨年4月。きっかけは新型コロナウイルスの世界的な感染拡大だった。小学1年でサッカーを始め、3年生の時に設立間もないFCアヴェニータソルに入った。当初は借りた広場の石拾いをしながら練習。それでも、中学3年の時にeisu杯県ユース(U-15)サッカー選手権大会で優勝した。ポジションはゴールキーパー。日本代表を目指し、強豪・県立四日市中央工業高校へ進学した。

しかし、高校時代はトップチームの中では2番手。公式戦出場の場合はほとんどなく、プロに進む難しさも感じていた。2年の時、小中学校時代にクラブで薫陶を受けた監督ががんで急逝した。生活態度にも厳しく、やんちゃだった自分を変えてくれた。「監督のような人間力も磨く指導者になりたい」。将来を決めた。

大学ではスポーツマネジメントを学び、関西学生サッカー連盟でリーグの運営に携わりながら、サッカースクールでコーチもこなした。3年だった昨年2月、サッカー先進国スペインのバルセロナへ渡った。語学を学びながら、地域のチームで指導者修業を積み、コーチライセンスを取得する計画だった。

しかし、新型コロナウイルスの流行で、街はロックダウン(都市封鎖)され、学校の授業はオンラインに。外出も制限された。帰るべきかどうするべきか。2週間考え、帰国を決断した。

4月に伊賀に戻ると、クラブを運営するNPOの理事長中田純一さん(57)からクラブへの参加を誘われた。

卒論を書きつつ中田さんの会社で働き、平日は夕方から週末は朝から指導する。中田さんは「佑太なら指導陣のチームワークに必要なクラブの理念、価値観の共有ができる」と期待を寄せる。

周囲に合わせ個性を出せない子ともたに、「どうしたかったのか」とプレーをただし、考えさせた。すると自分の色を出すようになった。U-11のチームは、JFA全農杯チビリンピックU11県少年サッカー大会阿山地区予選を1位で通過。県大会への出場権を得た。

コロナ禍で人生設計の変更を強いられたが、「ここでもチームを強くする中で学べることもある」と前向きに捉えている。

「育成世代の指導で結果を出し、将来は指導者として『日の丸』を背負いたい」。この再出発は、サッカーの神様に導かれた必然だったと信じている。(立山光一郎)



四日市中央工業高校時代の森島さん=本人提供